

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 27 年度教育研究報告書

事業課題名	東アジアにおける日本哲学研究－国際学会での対話実践（継続）
代表者名	上原麻有子
事業概要 (600 字程度)	<p>2015 年 5 月 9 日、10 日に神奈川県の開成町で開催された「東アジア文化交渉学会」にパネルを組み参加した。日本哲学史専修の修士課程二名、博士課程一名、OD 一名の計四名が参加し、京都学派の哲学について報告した。参加者の担当、および発表テーマは以下の通りである。</p> <p>〈司会〉 中嶋優太（京都大学・西田幾多郎記念哲学館研究員）</p> <p>〈発表者〉 八坂哲弘（京都大学） 「On Emotion in Nishida Kitaro' s Philosophy」 高崎和樹（京都大学） 「西田幾多郎の「私と汝」における思索の流れとその転換」 高田理可（京都大学） 「三木清『歴史哲学』における「パトス」について」</p> <p>西田幾多郎についての二つの発表では、「西田における感情」と「西田哲学の変遷」というそれぞれの視点から、自己と他者のコミュニケーションという問題が考察された。三木清についての発表では、三木の主著の一つである『歴史哲学』における、三木「パトス」という概念の解釈と検討がなされた。日本哲学史専修の卒業も来場し、発表者との議論に加わった。</p>

成果の概要
(800 字程度)

参加した学生、ODによる発表では、会場との活発な質疑応答がなされた。同学会では、東アジアにおける文化交流についてさまざまな視点から議論が展開され、学生、OD にとっては研究上の新たな視点を見出す良い機会となったようだ。

以下、発表した学生の感想である。

- ・日本哲学というテーマで統一されつつも、西田哲学の前期・後期そして三木清という複数の視点によるダイナミックな発表が実現できた。議論を通じて、西田幾多郎から三木清への日本哲学史の流れがどのようなものであったかが、パネル参加者にも理解されたようであり、有意義な発表であったと思われる。
- ・西田哲学の前期・後期における他者論がそれぞれ取り上げられ、それらの発表が議論を通じて比較されたことによって、西田哲学における他者論が一層幅をもったものとして、発表者自身としてもあらためて考え直すことができた。
- ・パネル参加者との議論によって、歴史的背景という視点から三木清の歴史哲学を捉え直し、三木哲学の主なテーマであった歴史哲学とバトスの関係について新たに考察すべき点を見出すことができた。
- ・「東アジアにおける文化交流」をテーマにする学会であったからこそ、東アジアという広範な視点から日本哲学を捉え直すことができた。

修士課程、博士課程にある、まだ外部で研究発表をする機会のない学生たちを積極的に、学外の交流の場へと送り出すことが、本プロジェクトの重要な目標であるが、今年度も、それは達成されたと思われる。演習で顔を合わせるいつもの仲間ではない、外部の学生や研究者との交流から刺激を受け、自分の研究にポジティブに反映させようとする姿勢が、参加学生たちに見られた。このような経験の成果は、演習での発表やコメントの仕方に明らかに現れている。